



果菜類の管理

トマト、ナス、ピーマン、キュウリ等、夏野菜の植付けが始まりましたが、**苗の深植えは絶対避けて下さい**。苗植付け後は、初期生育を促進し、高品質果生産および春先の病害虫発生防止(予防)のための重要な管理作業が待ち受けていますが、適期作業が高品質果、多収生産のポイントです。

●支柱の設置と苗の誘引

果菜類を定植したら、①風による揺れ防止、②苗を真っ直ぐ伸ばすために、直ちに支柱を立てて、苗を誘引結束して下さい。特に、ナス科野菜類は風により、地際部が揺れて傷がつくと、土壌病害が傷口から侵入し、収穫直前頃になって株全体が枯死する**青枯れ病**が発生する恐れがあります。

●トマトのわき芽かき

トマトは、根が活着すると各節からわき芽が発生しますが、これらは全てかきとって下さい。畑を巡回すると、この作業が遅れて、過繁茂状態になり、果実肥大や着色が遅れたり、奇形果が多く着いている株が目につきます。**わき芽かきはこまめに早期に行うことが重要**です。なお、わき芽かきは鋏を使わず極力手で行って下さい。

●キュウリの下葉かき

キュウリは、本葉が5~6枚頃になると、一番下の節から順に雌花が着き、わき芽も発生してきますが、これをそのまま放置し、着果させると、草勢が極端に弱り、上位節の子づる、孫づるの発生が少なくなります。

- 本葉5~6枚の頃→**下から5節目までの雌花やわき芽は全て摘み取って下さい**。
- 本葉13~15枚の頃→下から2節までの葉2枚を摘み取って下さい。
- 本葉17~18枚の頃→下から5節までの葉を全て摘み取って下さい。

下葉かきは、草勢維持の他、地際部の通風が良くなり病害の発生予防に大きな効果があります。

●各種病害の予防防除

苗の定植直後に各種病害の発生予防のため、**ダコニール1000の1,000倍液**を散布して下さい。

●うどん粉病の防除

5月に入り、天候が安定し、高温乾燥が続くと、うどん粉病が多発する恐れがあります。上位葉への発病が進むと収量低下の大きな原因になります。発病がみられたら、**ストロビーフロアブル3,000倍液**を散布して下さい。

特に、昨年多発したハウスではハウス内の換気をこまめに行い、昼夜の気温格差を極力抑えて下さい。なお、発病葉は早期に摘除してハウス外へ持ち出し、胞子の飛散を防ぎ、二次感染防止に努めて下さい。

●追肥の施用

果菜類の追肥は、トマトは果実が500円玉の大きさになってから、ナス、ピーマン、キュウリ等は最初の収穫が始まってからが基本ですが、気象条件に応じた追肥が収量・品質を左右するので、追肥施用は次号で詳細に記載します。



温州ミカン

●病害虫防除

そうか病、黒点病の発生を考慮し、花卉の約8割が落ちたら**ストロビードライフロアブル2,000倍に展着剤アブローチBIを1,000倍になるよう加用**し、散布して下さい。

キク

●カスミカメムシ類の防除

カスミカメムシ類は、体長が5mm程度と小さく、動きが活発なため、発見しにくいカメムシですが、キクの頂部を吸汁し、芯止まりや曲がり、花の奇形を引き起こします。アブラムシ類やハモグリバエとの同時防除を兼ねて下記の防除を行って下さい。

●強風対策

例年、4~5月にかけて嶺南地域では春の嵐により、風害を受ける危険性がありますが、強風が予想される場合は、マルチや防風ネットが飛ばされないよう確認して下さい。

強風通過後は、葉や茎の傷口から各種の病害が侵入するので、速やかにダコニール1,000の1,000倍液を散布して下さい。なお、葉が痛んだ場合は液肥(1,000倍)を施用し、草勢回復に努めて下さい。

表.薬剤防除の一例

散布時期	薬剤名	倍数(倍)	同時防除できる害虫
5月	上旬	ダントツ(溶)	アブラムシ類、ハモグリ
	中旬	スミチオン(乳)	アブラムシ類
	下旬	スタークル顆粒	アブラムシ類、ハモグリ
6月	上旬	アディオ(乳)	アブラムシ類、ヨトウムシ

水稲

田植えと、その前後の管理が品質の良い米づくりのスタートとして重要です。適正な移植作業と除草剤の効果をも高める水管理など、初期管理を徹底して下さい。

代掻き

- 代掻きは少なめの水で行い、均平を主目的に掻きすぎないように注意する。
- 代掻き後は湛水し、土が落ち着いてから田植えを行う。

田植え

- 健全な苗を浅めに植えつける。
- 軟弱徒長苗や葉の黄色い老化苗を深植えすると、初期生育を遅らせ、収量・品質・食味に悪影響を及ぼすので注意する。
- 栽植密度は坪当たり50~60株程度、1株3~4本の細植えとし、極端な疎植や密植は避ける。
- 前年、紋枯病が発生した圃場では箱施肥を施用し、発生を予防する。
- 補植用の苗を圃場に放置しておく、いもち病の発生源となるため、補植後はすぐに処分する。

田植え後の水管理

- 田植え後は活着促進のため浅水とし、遅霜が予想される時や、風が強い時は一時的に深水で管理する。

除草剤の適正な使用

- 除草剤は代掻きや田植えから日数が長くなりすぎないように適期に散布する。
- 田植え同時剤は移植後すぐに入水し、24時間以内に目標の水深(3~5cm)になるようにする。
- ジャンボ剤やフロアブル剤は表層剥離やアオミドロが発生している水田では効果が劣るため使用しない。
- 除草剤散布後は水田表面の土が露出しないよう処理後7日間程度湛水(水深3~5cm)状態を保ち、落水やかけ流しをしない。

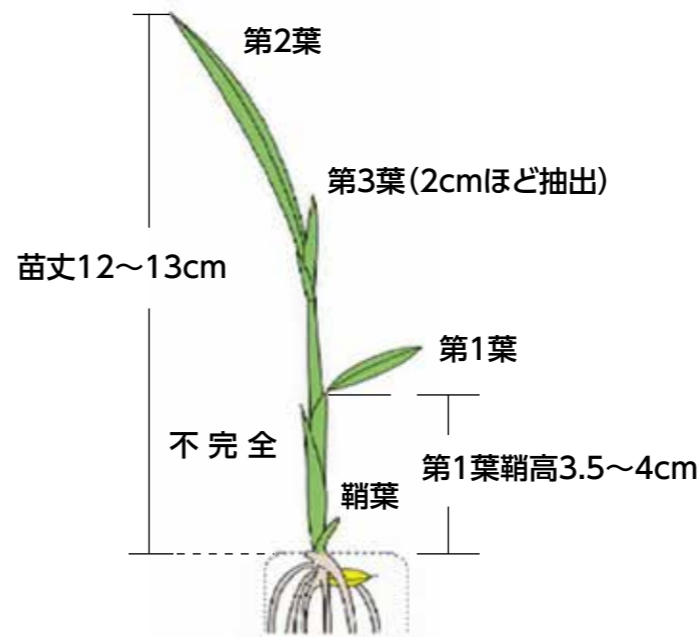
田干し・溝切り

- 「湧き」が見られる水田では田干しを行う。
- 田干しにより土が適当な固さになったら、圃場内の通水を容易にするため、溝切りを実施する。
- 溝切りは、縦に3~5m間隔で行い、最後に排水溝や溝の縦横をつないでおく。

中干し

- 中干しは目標茎数(350~380本/m²程度、坪60株植えの場合1株20本程度)が確保されたら行う。
- 中干しはあくまでも「中程度に干す」であり、砂質浅耕田や乾田は、干しすぎないように注意する。

健全な稚苗の姿



圃場条件	程 度
地力のない砂質浅耕田	足跡に水が残る程度
乾田	弱め(田干し程度)
地力のある湿田 生育が旺盛な圃場	強め(ひび割れの幅は1cm程度以下)

※水不足が予想されるときには、やや軽めに行って下さい。

